

まちへの思いが つなぐ 地域の絆

自分の住むまちの記憶を伝えたい。元気なまちに育てたい。仲間とともにまちの魅力を発信する地域の活動を紹介します。
【問合せ】区政情報課広報係(本庁舎3階) ☎(5273)4064へ。

人の結びつきが守る神楽坂の風景

NPO法人粋なまちづくり倶楽部

散策を楽しむ人が思い思いに行き交う神楽坂。昔ながらの建物や趣のある路地が、古き良きまちの風情を残しています。こ



まちを歩くと石畳の路地に出会います

うした神楽坂ならではの「まちの良さ」を守ろうと、地域の方と専門家が協力し、平成11年から「粋なまちづくり倶楽部」が活動しています。



「昔ながらのコミュニティが残っているのが神楽坂の良さなんです」と語る山下さん

「まちづくりは人づくり。人の気持ちが変われば、まちも変わります。まず、自分たちの住む神楽坂の風景を残していこうと、イベントや勉強会を開いて、

まちづくりを考えてきました」と話すのは山下馨さん(同法人事務局長)。「まちづくりの主役は地域の皆さん」との考えで取り組みを進めてきたことから、現在では、まちの良さを再認識したさまざまな方が、まちづくりに関わっています。

取り組みの一つが、区と協働で実施した「神楽坂の地域資産を登録文化財として表彰・保全する事業」。この成果として、昨年7月には、4件の建築物が国登録有形文化財に登録されました(写真左)。また、10月に開催したシンポジウムでは、登



「素敵な建物ですね。また訪ねたい」ガイドの案内で文化財を巡ります

録文化財の意義などを広く紹介。登録文化財を巡るまち歩きには、約70名の方が参加しました。まちを大切に思う心が、神楽坂のさらなる魅力の発信につながっています。



横丁に昔の雰囲気が残っていますね

黒猫のあるお店も見られます

高橋建築事務所社屋(アユミギャラリー)



矢来町/木造2階建/昭和29年竣工
建築家・高橋博の設計。通り側には出窓を設け、イギリスの田舎家を思わせる素朴な外観が景観に潤いを与えている。

鈴木家住宅主屋



横寺町/木造平屋建/昭和22年竣工、28年改修
建築家・高橋博の自宅兼アトリエとして設計。和風建築ながら外観の一部にレンガ壁を使用し、天窗を配した個性的な建築。

宮城道雄記念館 検校の間



中町/木造平屋建/昭和23年竣工、25年・30年移築
箏曲の第一人者である宮城道雄が、作曲や随筆の著作などに使用した茶室風の趣のある書斎。

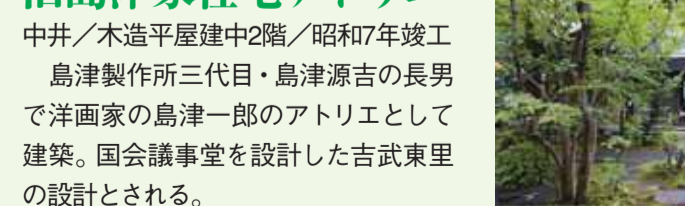
矢来能楽堂



矢来町/木造平屋建一部地階/昭和27年竣工
観世九皇会の本拠点として今も上演を続ける、都内でも数少ない木造の劇場施設。舞台や客席など風格のある内部空間が際立つ。

こちらも昨年7月に国登録有形文化財に登録されました

旧島津家住宅アトリエ



中井/木造平屋建中2階/昭和7年竣工
島津製作所三代目・島津源吉の長男で洋画家の島津一郎のアトリエとして建築。国会議事堂を設計した吉武東里の設計とされる。

※このほか「旧常盤家本館」(神楽坂)、「目白ヶ丘教会礼拝堂」(下落合)が新たに登録され、昨年12月に区長が登録プレートを交付しました。
※紹介した建物の内部はいずれも原則として非公開です。

内藤とうがらし みんなで四谷の名物に

四谷地区協議会

「江戸の食文化の掘り起こしに取り組みNPOから声が掛かったのを機に、見た目に美しく、食べてもおいしい四谷の名物として、一昨年から内藤とうがらしを復活させる活動を始めました」と話すのは、田中健士さん(同協議会)。「昨年は約千株の苗を配布し、学校や商店街、自宅と、幅広く地域の皆さんに育てていただきました。赤い実と葉の緑のコントラスト

が鮮やかで、料理にも使え、多くの方が楽しんで育てていますよ」。



好みで七味の分量を変えて調整します

この日は、四谷中学校コミュニティクラブが、収穫したとうがらしを使って「内藤七色とうがらし」を調合するワークショップを開催。「混ぜると、とうがらしの香りがより際立ちますね」と、できたての香りを堪能しました。



黒胡麻 粉山椒 麻の実 海苔などにとうがらしを加えます

「内藤とうがらしを通して江戸以来の地域の歴史に触れたり、四谷のまちに愛着を持っていただけならいいですね」と期待する田中さん。まちを彩る真っ赤なとうがらしが、四谷の新しい名物になる日が近づいています。



きれいな七色でしょ



江戸時代には空に向かって伸びる実が辺りを真っ赤に染めました



自分で育てながらしを使うのがとても楽しみです

まず最初に入れますのは、武州川越の名産・黒胡麻がはいります。続いて入れますのは、紀州は有田のみかんの皮、これを珍皮と申します。……



内藤七色とうがらし売りの口上を実演する田中さん

アートでつくる明るく元気な歌舞伎町

宝塚大学東京メディア・コンテンツ学部

「風船もらったんだね。風船と一緒に描こうか」と話しかけながら、子どもの似顔絵を描く大学生。同学部は、地域の皆さんや関係団体が一体となって歌舞伎町を誰もが安心して楽しめるまちにしようという取り組み「歌舞伎町ルネッサンス」に積極的に協力し、昨年9月、「歌舞伎町タウン・マネージメント広報大使」に任命されています。

この日は、大久保公園で開催された東日本大震災復興支援イベント「歌舞伎町農山村ふれあい市場」に、似顔絵のブースを出展。「普段は一人で黙々と描きますが、来場者といういろいろな話をしたり、幅広い世代の方と

触れ合う絶好の機会ですね」と、笑顔で話してくれました。バンドの演奏に合わせて即興で絵を描く「ライブペイント」も披露。音楽に合わせてリズムカルに絵を描く姿に、会場は大きな拍手に包まれました。



落書きの絶えなかった新宿ガードに「空と命」がテーマの壁画も描きました

「こうしたイベントを通して、地域の皆さんにアートの楽しさを感じていただけたらうれしいですね」。少し近寄り難いイメージがあった歌舞伎町が明るく身近なまちに変わるよう、若い力が活躍しています。

似顔絵を描きながら会話を弾みます



絵と音楽の融合は新たな文化を発信する歌舞伎町にぴったり



かわいく描けているでしょ!



家族の記念になりました

